



全職員で全校児童を育てる 学校体制の充実に向けて



いすみ市立東海小学校長 たなか のりお
田中 憲生

1 はじめに

本校は、いすみ市の東部に位置し、全校児童 161 名、特別支援学級 2 学級を含め 8 学級の規模である。児童は明るく活発であり、好奇心旺盛な面をもっている。反面、根気強く課題追求することが苦手で、自主的、主体的に行動する意識に乏しく、周囲に流されやすい面をもっている。

学区に児童養護施設があり、そこから通う児童が約 15% 在籍している。複雑な生育歴を抱えており、特別な支援を必要とする児童も少なくない。

どの児童も安定した学校生活が送れるような環境づくり、人間関係づくりが本校の課題であり、その課題解決のために全教職員が協力して全校児童を育てることを念頭に置き、取り組んでいる。

2 学習規律・ルールの一

児童が落ち着いて学習できるように、また児童の規範意識を育てるために、「東海小スタンダード」、「東海小学校のよい子の一日」を児童に示している。「東海小スタンダード」は、学習に関する 5 つの視点を教職員で共通理解するとともに、児童に徹底させるよう努めている。

①あいさつ

- ・号令のあいさつの仕方を統一する
- ・「元気にあいさつ」を徹底する

②学習用具（筆箱の中身を統一する）

③机上の整理（置き方を統一する）

④姿勢・態度

- ・話すとき：聞いてほしい人の方に顔を向ける
- ・聞くとき：共感的に聞く・最後まで聞く
- ・読むとき：本を持つ・おなかと背中がグーひとつ・背筋ピン・両足の親指を床にふんばる
- ・書くとき：鉛筆を正しく持つ・左手は指先で体を支える

⑤返事・答え方

- ・「はい」はのばさず歯切れよく
- ・手の挙げ方：まっすぐ・耳に付けて右手を挙げる

「東海小学校のよい子の一日」は、登下校時の約束や学校での過ごし方についてのルールを示したものであり、各家庭にも配付している。「生活のためのルールは、自分のためのもの、みんなのためのもの」と考えられるよう、学校と家庭とが連携して取り組んでいる。

また、学習環境の整備として、児童が学習に集中できるよう、教室前面には視覚の刺激となるような掲示物を貼らないことを、年度当初の職員会議で確認している。

3 教職員間の連携

(1) 児童の状況についての記録と全教職員での情報共有

児童理解のために「サポートカルテ」を作成し、活用している。これは児童一人一人について配慮が必要な事項、事例、指導・支援等を記録するもので、入学から卒業まで引き継ぐことにより、個々への支援や対

策に生かしている。

また、生徒指導や就学指導に関わる内容を話し合う「サポート委員会」を、毎週実施している。全教職員で効率的に児童理解を深める会議をもち、担任が一人で悩まずにチーム支援ができるようにしている。

(2)複数の教職員による指導体制の整備

本校は、市教育委員会から特別支援教育支援員の配置をいただき、特に支援を必要とする児童がいる学級に配当し、当該児童を中心に、支援に当たっている。全教職員で全校児童を指導することを念頭に、支援員や少人数指導、児童生徒支援の加配の教職員の他、教頭や教務主任等も含め、可能な範囲で複数の教職員での授業を行うようにしている。また、授業時間だけでなく、給食時等も複数の教職員で児童を見る指導体制をとっている。

(3)教育相談活動の充実

本校には、児童一人一人がより良い環境の中で学校生活が送れるよう、スクールカウンセラーが配置されている（隔週木曜）ので、これを活用しながら、児童への教育相談活動を進めている。また、希望する保護者や教職員もカウンセリングを受けられるようにしている。児童や保護者からの相談を受ける場として、「サポート相談室」を設置しており、相談活動の他、児童の個別指導が必要な場合や、児童のクールダウンが必要な場合にも活用できるように整えている。

4 関係機関等との連携

(1)児童養護施設、児童相談所等との連携

冒頭に述べたように、本校の学区には児童養護施設がある。そのため、児童養護施設や児童相談所等との連携は、なくてはならないものである。連携がスムーズにいくよう、児童養護施設の教職員との連絡会を年2回、地区の民生委員との連絡会を年1

回開催している。全教職員が参加し、情報交換を行い、児童の指導・支援に生かしている。

また、サポート委員会での話し合いだけでは解決が難しいケースは、ケース会議を行い対応している。児童養護施設の児童のケースの場合は、児童養護施設や児童相談所の関係職員、市教育委員会指導主事等にも参加を要請している。この他に、児童養護施設では、施設内で起こった問題行動について話し合う「安全委員会」を開いて対応を協議している。学校からは管理職が参加し、必要に応じて連携した対応をとっている。

(2)不登校対策

3月に県教育委員会から出された「千葉県版不登校対策指導資料集」を、全教職員に印刷・配付した。これを活用しながら、「居場所づくり」「絆づくり」等、不登校を予防する取組、魅力ある学校づくりに努めている。また、学校だけでの対応では解決が困難な場合は、訪問相談担当教員やスクールソーシャルワーカーの助言・支援を受けたり、必要に応じて市の福祉部門との連携を図ったりしている。

5 終わりに

これまで構築されてきた本校の体制をさらに充実させるよう努めているが、研修による教職員個々の資質向上も大切である。若手教員が増えているので、児童理解や対応の仕方についての研修を校内研修に位置付け、教職員の資質の向上を図っていききたい。また、外部の関係機関との良好な関係を維持しながら連携を強め、児童への支援に必要な情報共有がスムーズに行われるよう、校長としてリーダーシップをとっていききたい。



頼まれごととは試されごと！

県立船橋豊富高等学校教頭 津田 巨彦



1 はじめに

(1)学校の概要

本校は、船橋市の北東部、アンデルセン公園や船橋県民の森といった自然豊かな地域に位置し、本年度で36周年を迎える全日制の課程・普通科高等学校である。

(2)特徴的な教育課程

2年次からのコース分けにより、個々の進路希望実現を図っている。

①1組＜情報コース＞

情報に関する知識と技能を学び、ワープロや表計算の資格取得を目指す。

②2組＜福祉コース＞

福祉の制度や介護技術などを学び、「介護職員初任者研修」の資格取得が可能である。

③3～6組＜文理コース＞

選択科目が数多く用意され、進路に合わせた柔軟な学習が可能である。

(3)ユネスコスクールに認定される

ユネスコスクールは、世界180か国以上の国・地域で10,000校以上の加盟がある。これにより本校は、『平和や国際的な連携を実践する学校』となっている。

2 本校の取組

(1)学習指導について

「わかる授業・できる授業を提供し」

「ほめて、認めて、励まして」

「主体的な学習活動を促しつつ」

「基礎学力の定着を目指して」

今日も授業担当者は奮闘する。

①少人数授業

1年次の数学と英語で2クラス3展開。

②外部教育力の活用

(ア)「学習ボランティア」

秀明大学学校教師学部生が、年間通して数I授業に参加。

(イ)「出前授業」「一日体験ツアー」

東京情報大学との連携事業。

情報コースの生徒対象。

(ウ)「特別講師」

介護福祉士・社会福祉士等による授業。

福祉コースの生徒対象。

(2)進路指導について

近年の進路→就職と進学がほぼ半数

進路決定率→約9割

この数字は、進路指導部職員及び該当学年団が並々な熱意をもって生徒一人一人に対して親身になって粘り強く指導を行った成果である。

(3)生徒指導について

生徒に寄り添い、粘り強く繰り返し話して聞かせる指導に取り組んでおり、一部ではこれを「漢方薬」と呼ぶ。

その結果、生徒の素の部分（人懐こく素直で明るい）と規律を守る部分（ルール・マナー）とを併せ持つ、明るい雰囲気のある学校になりつつあることをこの一年で実感している。

(4)部活動について

顧問教員たちの愛と情熱の指導により各部の雰囲気改善され、それに伴って地区大会を突破する運動部が増えてきている(バスケットボール部、弓道部、陸上競技部)。

文化部も若い指導者たちによって着実に活動をし、コンクールや発表会等を経験するたびに自信をつけてきている。

本校部活動は、日々進化する手応えがあるので応援していて楽しいことこの上ない。

ここでは特に「JRC-UNESCO部」を紹介する。

校内随一の30名を超える部員が、校外で活発に「青少年赤十字活動」を行っている。

昨年度は、県知事表彰「ライトブルー少年賞(団体の部)」受賞、「2020オリパラおもてなし隊」参加など。今年度は、東京国際フォーラムにて「高校生ボランティア・アワード2018」に出場するなど全国規模の活躍をしており、ユネスコスクールとしての面目躍如である。

(5)地域との連携について

「地域に貢献し、応援される学校」

①学習ボランティア

豊富小学校児童の学習サポート。夏休み4日間のべ50名参加。

②近隣公民館主催行事への協力・参加

地域PC教室・認知症サポーター養成講座・文化祭への作品展示・読み聞かせ会・書初め教室・書道パフォーマンス・吹奏楽演奏・演劇公演など。

③高齢者及び障がい者施設での現場実習避難訓練のサポート・夏祭りの企画運営・慰問・演奏会など。

④HR単位で学校周辺の清掃活動

3 教頭職について

教員時代と比べて生徒と直接係わる機会が激減し、かつ文書処理に追われ、萎える気力と格闘するのが初期の教頭職であろうか。そのような時期、私は「コトバのチカラ」によって勇気づけられ、前向きになることができたので、ここにいくつか紹介したい。

(1)「頼まれごととは試されごと」

何か頼まれたら頼んだ相手の予測を上回ってやれ。

(2)「プラスワン」

現状プラス、何かもう一つ自分にやれることはないか。

肝は、「ひとの役に立つ」「相手に喜んでもらう」など「利他的なこと」を「自分の喜びとする」ことなのだろう。

「現実と同じでも、考え方(=心の持ちよう)によって仕事は楽しくなる」

(3)「長所伸長法」

得意を伸ばした方が楽しいし、長所を伸ばせば短所は自ずと目立たなくなるよ。

これらの考えからすると、教頭職プラスワンは、「教職員の長所に気づき、応援し、励まし、楽しく教育活動ができるように尽くすこと」となる。

校長の「大きな後ろ盾(=安心感)」の下、常にOJTを受けながら楽しく仕事をさせていただいていることに感謝し、これからも船橋豊富高校のために「教頭業務」と教員のやる気スイッチをONにする「プラスワン」を全うしていく。

4 終わりに

ある恩師が、式辞で生徒に繰り返し話されていたコトバを紹介する。

「人並みは人並みで終わる 高みを目指せ」

このコトバには、ひとを奮起させずにはいられないチカラがこもっている。

学校を
動かす

主幹教諭として教務主任として

四街道市立和良比小学校主幹教諭

うえたに
植谷

しょう
祥



1 はじめに

平成29年度より、本校に主幹教諭として赴任している。主幹教諭として2年目、教務主任として10年目を迎えている。主幹教諭は、校長及び教頭を助け、命を受けて校務の一部を整理し、並びに児童の教育をつかさどる。教務主任は教育計画の立案その他の教務に関する事項について連絡調整及び指導・助言に当たる。両方の違いがわからず、戸惑いや不安ばかりが先行し、暗中模索の状態であった。

校長からは主幹教諭として、教頭や学級担任をサポートすること、若年層教諭の授業力向上に励むように指示があった。校内事情によって教務主任の分掌も仰せつかった。

2 教頭の補助

教頭のサポートといっても、教頭に信頼してもらえないと任せてもらえない。そこで、教頭が大変だろうと思えることからサポートした。各種アンケート集計やPTAに関わる仕事、学校評価などである。徐々に相談をして、一緒に進められるようになった。

3 学級担任へのサポート

私が教員になった30年前とは社会が大きく変化し、学校や学級に対して様々な要求が増えてきている。その最前線に担任がいる。

そこで、保護者との面談等は担任一人が行うことのないように、教頭・学年主任・養護教諭や私などが必ず同席して、面談内容や要求を把握するようにした。情報を共有することで担任が孤立しなくなり、先手の対応がとれるようになった。

4 授業力の向上

どの学校でも若年層教諭の割合が高くなっている。本校も昨年度23学級中12学級が5年目未満の教諭、講師であった。

4月当初から授業参観をすることとした。理科の授業では、縦書きで板書されていたり、算数科では角度に「℃」が用いられたりしていた。想像の範囲を超えていた。

早急に5年目教諭2人をリーダーとして、若年層研修をスタートさせた。授業参観回数を多くするため、形式を示して指導案は略案とした。授業後はベテラン教諭を講師として分科会協議を実施した。検証のために参観することもあった。

本年度は校長のアイディアで若手教諭以外は全員講師として定期的に10分間の「ミニ研修会（いろはのい）」を開催している。

5 小中一貫教育コーディネーター

四街道市では義務教育9年間を一体的に捉え、各中学校区で学習面・生活面ともに系統化された教育活動を実施する小中一貫教育に取り組んでいる。教務主任がコーディネーターとして、教職員や児童生徒の交流などを計画実践している。本年度は、中一ギャップ解消のため教育課程の中期（小5～中1）の学習面や生活面の体制作りに取り組んでいる。

6 おわりに

どれだけ児童のことを考えて職務を遂行しているか。効率や帳尻合わせのために仕事をしていないか。繰り返し自問自答して、これからも主幹教諭として取り組んでいきたい。

 子供を知る

学びからの挑戦

旭市立三川小学校教諭

ふじわら さやか
藤原 清華

2年目の目標を「挑戦」と掲げて、今私は、子供たちと毎日向き合っている。私にとって初任者研修は、社会人としての在り方から学級経営や授業の進め方などを一からご指導いただいたり、同期・異校種の先生方とコミュニケーションを取ったりすることができる場であった。そこでは、新たな学びや発見がたくさんあり、吸収することができた。

2年目は、初任者研修で吸収した様々なことを実際に学級経営や授業の中で挑戦してみようと思った。初任者研修のファイルから探して、教わった学級レクを行ったり、算数の導入を工夫してみたりした。実際に行ってみると、子供たちが活き活きと意欲的に取り組むなど、効果が表れることがあった。しかし、学級や子供の実態に合っていない時は、上手くいかないこともあり、さらに工夫することで成果が表れた。教えていただいたことを実践し、さらに工夫を繰り返すことで、指導力に結び付くと感じている。「まずは、やってみる！（挑戦）」を今は大切にしている。

初任者研修での指導教員や先輩の先生方の丁寧なご指導は、私の教師としての礎となる。また同期は、楽しい話や悩みを共有することができ、心の支えでもある。

支えてくださる周りの方への感謝の気持ちを忘れずに、常に学んだことや新たなことに「挑戦」し続ける教師でありたい。

 子供を知る

思いやりの心

横芝光町立光中学校教諭

しんぎょうじ つばさ
真行寺 翔

私が初任者研修で学んだことを一言で言うと「思いやりの心」の大切さである。私は初任者であった昨年、3学年の副担任をしていた。その7月のこと。私は進路指導主任兼初任者指導教員の先生と進路事務の作業をしていた。私が何気なく学級担任の先生方の机上へ多量のプリントを置こうとした時、その先生から学級担任の先生方が見やすい順序に並び替えて渡す「気配りの心」が大切であることを教わった。また、校外での初任者研修で印象に強く残っているのは学級経営についての研修である。研修では、学級経営の基盤は「信頼関係」であるということを学んだ。そこでは、叱るときはしっかりと叱ることや感謝の気持ちをしっかりと伝えることを学んだ。この研修で、しっかりと目の前の子供たちと向き合い、思いやりの心で真摯に関わることの大切さを知ることができた。

私は現在、1年生の学級担任をしている。そこで、私が昨年学んだことを生かし日々意識していることは、常に子供たちの目線に立って考えるということである。子供たちが何に悩み、何に興味をもって、何を考えているのか。それを知るために、できる限り休み時間や朝や放課後に子供たちと接するように心掛けている。授業で子供たちが興味をもって取り組める導入を工夫したり、支援が必要な生徒に対し、支援の方法を考えたりすることにこれらが役立っている。これからも思いやりの心を大切にして、教師の道を歩んで行きたい。

授業を
創るみんなでできる
学び合いの授業をするために

浦安市立舞浜小学校教諭 渡邊 梨恵



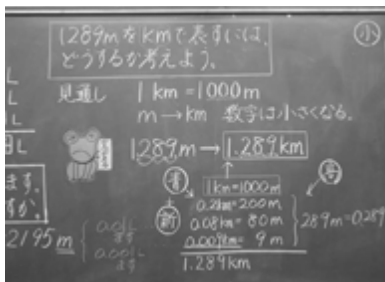
1 はじめに

小学校教諭になって14年目を迎えた。昨年度、今年度と4年生を担当している。初めての4年生担任だったため、なかなか学習の見通しがもてずにいた。また、算数の学習内容が多いことや、実態として算数が苦手な子供たちが多いこともあり、何か手立てを考える必要があると感じた。失敗や反省を繰り返しながらの実践だが、自分自身を振り返り、見直す機会をいただいたことに感謝したい。

2 授業実践（第4学年）

(1)問題意識を高める教材の工夫

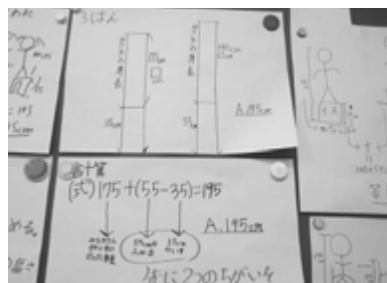
「みんなで」学習するためには、課題に対して全員が問題を把握できるようにするための予想・解決方法の見通しを立てることが大切であると考え。「やってみよう」「解いてみたい」と子供たちが主体的に取り組める教材教具の工夫はもちろん、当たり前かもしれないが子供たちでめあてを考えたり、まとめを考えたりするようにしている。特にめあてに関しては、その日の学習で何を学ぶのが明確になるように、子供たちも色々と考えを出し合って決めている。



問題把握の段階で難しい場合は、ペアやグループでの話し合いも有効である。

(2)学び合える環境作り

「みんなで」の「で」には、学び合いを大事にしたいという思いがある。学級の実態として、算数が不得意な子供たちが多いので、どの子供も算数の学習に参加できる環境を作っていきたいと考えている。算数が得意な子供は「分かってもらえるように説明する」、算数が不得意な子供は「説明してもらって分かる」でよいのではないかな。そうすれば、「みんなで分かる」の実践につながると信じている。実際に、「図に表して考えよう」の学習では、不得意な子供たちにとって問題文を読み取り、そこから図を描いて答えを求めることは非常に難しかった。



しかし、グループ学習にしたことで、得意な子供たちが「どんな図にすればみんなに分かてもらえるか」と考え始め、話し合いを深めている姿が見られた。不得意な子供たちは、懸命にその子供たちの説明を聞いて、自分のノートにまとめることができた。その学習では、確実に学び合いの様子が見られた。

(3)学習の定着を目指して

①ミニ復習プリント

4年生にもなると、子供たちの中で算数が得意、不得意とはっきり分かれてくる。また、習得する内容も多いため、授業の進

度も早くせざるを得ない。そうすると、算数が不得意な子供たちは、学習中の単元を理解するだけで精一杯になり、以前学習した内容が抜けてしまう傾向にある。そこで、少しでも既習の定着を図るために、授業の最初の5分間は復習タイムをとっている。問題を解いた後は、すぐに補助教員に丸つけをもらい、授業の最後に間違えがあ



れば直すようにしている。解いて、直すをすぐできるように意識している。3～5問ではあるが、それを継続して行うことで計算の仕方を思い出したり、計算を早く行えるようになったりと成果が出ている。

②お助けカード

算数が不得意な子供たちや、理解するのに時間がかかる子供たちに対して作っている。単元ごとに覚えて欲しい大事なことを、学校だけではなく家庭学習でも使えるように、筆箱に入るサイズにしている。割り算の筆算の仕方（たてる、かける、引く、おろす）や、計算の順序、単位換算など覚え



るのに時間がかかる内容のことが多い。子供たちの様子をみても、課題を解いている際、分からなくなったら自然とカードを取

り出しているの、効果的に活用できているのだと感じる。不得意な子供たちが、「まだ覚えていないから問題が解けない」ではなく、「これがあればみんなと同じように問題が解ける」という考えを大事にしたいと思っている。

③自主学習用プリント

学習内容をさらに定着させるために、授業や宿題等でプリントも多く活用している。しかし、子供によってはやりきれなかったり、余ってしまったりする場合もあるので、それらのプリントは自主学習で復習ができるように、ケースに入れて自由に持ち帰られるようにしている。ちょっとしたことだが、自分に必要な単元の復習プリントを選び、自主学習に取り組んでいる子供が増えているので、継続して行っている。

④心身障がい児補助教員との連携

算数が不得意な子供たちがとても多いので、「みんなでできる学習」をするにあたって、補助教員と二人で学習指導ができることは私にとっても子供たちにとってもとても大きいと感じている。「お助けカード」も、私の「こういうのを作って欲しい」という願いですぐに作ってくれているので感謝している。今後も、子供たちのために何が必要かを相談しながら、授業を行っていききたい。

3 おわりに

恥ずかしながら、当たり前の実践しかしていない。しかし、自分自身が初心を忘れて、当たり前のことをしっかりと取り組んでいきたいと改めて感じている。また、算数だけではなく、どの学習においても子供たちの「できない」という不安を少しでも取り除けるような指導をしていきたい。これからも子供たちと楽しみながら、学び合いながら成長していきたい。